

【作物】

1 早期水稻の管理

(1) 水管理について

- ア 中干し直後：2～3回走り水を行った後に、間断灌水を行います。
- イ 幼穂形成期～穂ばらみ期：土壤水分が不足すると収量や品質が低下するので、水分を十分保ちます。
- ウ 出穂期～出穂期以降：浅水管理（2～3cm）をします。異常高温が続く場合は、かけ流し灌水で地温を下げ、根傷みを防ぎます。
- エ 登熟期：灌水して土壤に水分を与えたら、水は溜めずに、足跡に水がたまっている程度（飽水状態）にします。
- オ 落水期：落水期は収穫前7日程度としますが、収穫作業に支障のない程度に刈り取り直前まで走り水灌水で土壤水分を保ちます。

(2) 病害虫防除

防除時期	病害虫名	農薬名 濃度 使用時期
出穂期前	紋枯病	バリダシン液剤5 1,000倍、収穫14日前まで
穂揃期～傾穂期	カメムシ類 (ウカ類、ツガノロコバノイにも有効)	スタークル顆粒水溶剤 2,000倍、収穫7日前まで

(3) 倒伏軽減対策（徒長等で草丈が伸びすぎ、倒伏の危険性がある場合）

- 薬剤名：ピピフルフロアブル
- 使用時期：出穂10～2日前（使用時期厳守）
- 使用量：10aあたり75～100mlを水50～150lに希釈して散布。
- 注意点：ムラのないよう均一散布し、多量散布や重複散布は絶対に行わないで下さい。

2 普通期水稻の管理

(1) 中間追肥

根の活力を高めるため、出穂40日前頃に、PKミックスを20kg/10a施用して下さい。

(2) 水管理(中干し)

必要茎数(約18～20本/株)が確保され次第、足跡が軽くつく程度に行います。中干しの目安は約7～10日間、圃場により土の乾き具合が異なるため、土壤条件に応じて連続または間断での中干しをして下さい。

(3) 病害虫防除

田植時に「フィルター箱粒剤」を使用した場合は、出穂期まで防除効果が期待できますが、水稻の生育状況や病害虫の発生状態をよく観察して病害虫防除を行って下さい。

<松本>

【野菜】

1 さといも

(1) 病害虫防除

ア 疫病

疫病的発生条件は、平均気温24℃以上と風雨(湿度)です。灌水は後日の天候を考慮して、必要以上の灌水を行わない。また、圃場内の排水を良好にして、停滞水がないようにして下さい。本市における平均気温24℃以上は6月下旬頃です。すでに予防的にジーファイン水和剤を散布していると思いますが、まだの方は早急に散布して下さい。疫病は、圃場周辺から発病してくる場合が多いため、圃場の観察を行い、発病を確認した場合、発病葉を除去して、アミスター20フロアブルを散布して下さい。

アミスター20フロアブルでも疫病が多発すると防除効果が落ちますので、発病初期にできるだけ早く防除して下さい。また、同剤の使用回数は3回と少ないため、ジーファイン水和剤で予防散布に努めて下さい。

薬剤名	病害名	希釈倍率	使用時期/回数	特徴
ジーファイン水和剤	疫病	1,000倍	収穫前日まで / -	予防効果 希釈後、沈殿しやすいので攪拌機を使用する 高温多湿時被害を生じる場合がある
アミスター20フロアブル	疫病	2,000倍	収穫14日まで / 3回	予防及び治療効果がある 他の殺虫剤との混用はさける 高温多湿時被害を生じる場合がある

注意点：さといもは散布した液が付着しにくいので、展着剤「まくびか」10,000倍を加用する。

イ ハダニ類

ハダニは、高温乾燥が続くと発生します。一旦増殖すると防除が困難になるため、初期防除に心がけて下さい。

(2) 灌水

梅雨明け後、土壤水分の急激な減少により葉焼け症が発生するため、灌水が遅れないようにして下さい。

(3) 施肥

おおなか作業を行った化成体系の里芋は、おおなか1ヶ月後を目安にして高度化成444 40kg/10aを施用します。

2 やまのいも

(1) 施肥

肥料吸収は、7月上旬から始まり8月に最大となります。JAの施肥設計を参考にして追肥して下さい。最終追肥は8月上旬には終えて下さい。

(2) 病害虫防除体系

防除時期	薬剤名	適用害虫名	希釈倍率	使用時期/使用回数
7/上～中	アクラタ粒剤5	アブラムシ・カビトコガ	6kg/10a	萌芽期/1回

防除時期	薬剤名	適用害虫名	希釈倍率	使用時期/使用回数
7/上～中	コテツフロアブル	カンザワハダニ	2,000倍	収穫前日まで/2回
	シトラノフロアブル	炭そ病	1,000倍	30日/5回

防除時期	薬剤名	適用害虫名	希釈倍率	使用時期/使用回数
7/下～8/上	コロマイト乳剤	ハダニ類	1,000倍	7日/2回
	ベンコゼブ水和剤	炭そ病	600倍	21日/4回
	デルフィン顆粒水和剤	シロイチモジ ヨトウ	1,000倍	発生初期(ただし 収穫前日まで)/-

炭そ病対策として、台風、雷雨の後には、ラビライト水和剤400(14日/4回)で防除して下さい。

<渡邊>

【果樹】

1 温州みかんの摘果

樹の状態に応じた着果管理を進めて、中玉果を中心とする高品質果実生産に努めて下さい。

(1) 着果過多樹

樹勢維持と隔年結果を防止するために、早急に、上部を中心に樹冠の1/3を全摘果して夏梢(次年産用の結果母枝)を発生させます。※発生した夏芽は、ミカンハモグリガ(エカキムシ)の発生に注意。

(2) 着果不足樹

粗摘果は中止し、仕上げ摘果、または樹上選果により不良な果実を除去します。また、果実の周辺に光を当てて品質を向上させるために、かぶさり枝を除去して下さい。

(3) 着果、新梢ともに多い連年産樹

品質向上のため、摘果は9月以降に重点を置いて実施して下さい。

2 中晩柑類の摘果

早期摘果による大玉果の生産に向けて、粗摘果は生理落果終了後すぐに始めます。粗摘果に重点を置いて実施し、優良な有葉果を中心に結実させます。主枝先端部や内・スソ成り果実、直花果、奇形果、傷果、小玉果などを摘果していき、8月上旬までには葉果比100程度に仕上げるよう計画的に作業を進めましょう。併せて、果実肥大と減酸を促すため、雨が少ない場合には、積極的に灌水を実施して下さい。

3 病害虫防除

黒点病の薬剤散布間隔は、前回散布後の累積降水量200～250mmまたは30日です。本病に弱い品種は散布間隔を短くし、最も弱い「せとか」は累積降水量180mmまたは25日を目安にして下さい。

<可部>

【花き・花木】

1 シキミの管理

夏期は害虫の発生期です。お盆の需要期に向け防除を徹底して下さい。

(1) フシダニ

4～9月にかけて、成幼虫が展開直後の柔らかい新葉や新梢を吸汁し、葉にウイルス病的な輪紋症状やモザイク症状が出現します。成幼虫は体長0.1～0.3mm、淡黄色～橙色で群生します。

(2) 輪紋葉枯病

病斑は1～2cmで赤褐色の同心円状の輪紋を生じ、その後病斑上に灰白色のキノコ状～球形の小型の菌体を形成し、ひどい罹病樹は落葉します。

(3) 病害虫防除

定期防除として6月下旬～7月上旬に、殺菌剤のベンレート水和剤2,000倍、殺虫剤のオルトラン水和剤1,000倍、ダニ剤のピラニカEW1,000倍を混用散布して下さい。

防除は、高温時を避けて涼しい時間帯に行って下さい。薬剤は葉裏にかかるよう、ていねいに散布して下さい。

2 シンテツポウユリの管理

(1) 病害防除

最も注意する病害は「葉枯病」で、病原菌は糸状菌(カビ)の一種です。長雨が続きような湿潤な条件下で多発します。

ダコニール1000(1,000倍)、トップジンM水和剤1,500倍を降雨の度に散布します。梅雨明け後は、葉に汚れが残りにくいフルビカフロアブル2,000倍を散布します。

また、防除時期が高温期となるため、温度の下がった夕方に防除を行います。

(2) 葉焼け・倒伏の防止

梅雨明け後の高温となる時期には、土壤水分が不足すると葉先が焼けたり、切り花長が短くなるなど品質が低下します。畝間が乾いてひび割れしないように、畝間灌水を行います。また、強風対策として、生育の早いものを基準とし、遅れないように順次フラワーネットを上げ、倒伏を防止します。

<日野>

【畜産】

(家畜の生育適温と高温により生産に影響の出始める限界温度について)

	適温域(℃)	生産に影響の出る限界温度(℃)
乳牛(成牛)	0～20	27
肉牛(成牛)	10～25	30
成豚	0～20	27
採卵鶏	13～28	32

四国中央市で平年の最高気温が27℃を超えるのは6月下旬以降であり、家畜に徐々に暑熱ストレスがかかってきます。温度管理の目標は27℃以下です。

暑熱対策では、直射日光を防いで風通しを良くし、多湿になるのを防ぐのが畜舎管理の重要なポイントです。特に直射日光の遮断は最も重要であり、舎内の気温が上がらないように屋根や壁面に銀色寒冷紗やよしず等、断熱効果のある資材を効果的に設置して下さい。

同じ温度でも湿度が高くなると、より暑熱ストレスがかかるため、梅雨の期間中は特に注意が必要です。畜舎屋根や土間への散水や細霧冷房の実施は雨天時など湿度の高い時には逆効果であり、天候の状況を見ながら行うようにし、送風機との併用が必須です。

<二神>